城踏 SHIRO FUMI
姫路市立城郭研究室ニュース「城踏」No.93　2015年10月１日
編集・発行；姫路市立城郭研究室
〒670-0012　姫路市本町68-258 日本城郭研究ｾﾝﾀｰ内
TEL 079-289-4877　FAX 079-289-4890
URL http://www.city.himeji.hyogo.jp/jyokakuken/

刑部神社は50歳

意外とね、団塊の世代よりも若いんです。

城郭研究室では、写真家中村昭夫氏のご遺族から、氏が生前に撮影された姫路城の写真パネルやフィルムを一昨年御寄贈いただきました。その一部をこの夏に、「姫路城非常の造形美－中村昭夫写真展」として日本城郭研究センター内で展示をしました（中村昭夫『姫路城』朝日新聞社、1972を参照）。

写真１

さて、この写真展で写真１を展示しました。大天守最上階の内部を東から西に向いて撮影しています。この写真を見ると、室内が現状よりも広く感じます。それは、階段口の手前に刑部（長壁：おさかべ）社の祠が無いためです。

実は刑部社が大天守の最上階の室内で祀られるようになった端緒というのがよくわかっていません。刑部神そのものは、城のある姫山の地主神として古くから祀られていただろうこと、姫山全体を城郭化するにあたり、その神様をどこに奉ろうかということが問題になったことは十分に想像できます。たとえば、慶長14（1609）年、新たに播磨国主となった池田輝政への「**はりまのあるじ**」「**とうせん坊**」から輝政夫妻への呪いを予言した怪文書が見つかりました。呪いを防ぐため鬼門に八天塔を建てよとも。２年後、輝政は重病となり、例の文書が取沙汰され、「**とうせん坊**」の言うとおり鬼門に塔を建てたら輝政は治ったという逸話があります（堀田浩之「姫路築城伝説」『歴史群像名城シリーズ姫路城』学習研究社、2000）。この時、羽柴秀吉が城下の外れに移していた刑部社もいっしょに姫山に戻したとみられます。とノ四門のすぐ東にある門を八頭門と言いますが、これはもともと八天塔門でしたから、池田家中は怪文書のとおり、八天塔を鬼門に建てたとみられます。そこで刑部社の移動について、まとめておきます。

羽柴秀吉：総社もしくは城下のはずれ（吉田兼見）
池田輝政：〈祟りがあったとして〉姫山へ（八天塔の併設）
松平忠明：総社
榊原忠次：姫山の搦手口
陸　軍　：総社付属地（元塩町）→〈国道敷設のため〉総社境内

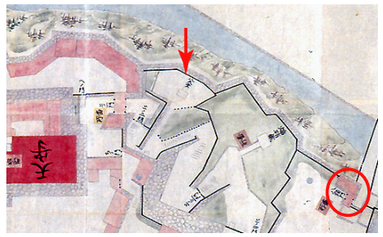


図１　矢印が刑部社・八天塔の位置
○が八頭門

江戸時代には松平忠明の一時期をのぞいて姫山にあったことは間違いないでしょう。榊原忠政以後は搦手口のとノ二門外に鎮座しており（図１。現在、大正３〔1914〕年の「長壁神社遺趾碑」がある）、城主自ら参詣することすらあったようです。近代になると陸軍が姫山から鳥居先門の東（元塩町）に降ろし、国道建設で立ち退いて総社に遷されたものの（写真２）、昭和20（1945）年には姫路空襲で焼失しました（刑部社の移動については、故横山忠雄氏のご教示）。

しかし一方で、最上階で刑部神を祀っていたものの、昭和21年には進駐軍兵士が祠の扉を開けて覗くので、姫路神社に遷座したともいい（橋本政次『姫路城史』名著出版復刻、1973）、戦前からすでに最上階にあったことをにおわす記述もあります。現在の祠は昭和40年に姫路神社から遷座されたものです（埴岡真弓「姫路城刑部姫伝説の成立と展開」『播磨学紀要』５、1999）。

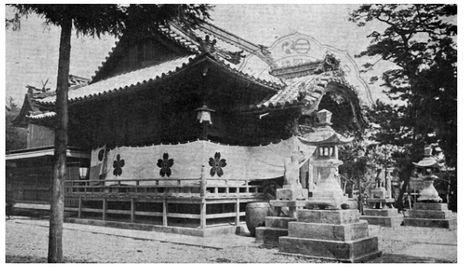


写真２　総社境内の長壁社
（津山邦寧氏所蔵の絵葉書より）

写真１には下り階段の鉄柵が右隅に写っているので、昭和の大修理直後の昭和39年とみれば、祠が無くても辻褄は合います。やはり問題は、戦前から昭和の大修理前までどうなっていたかということになります。

そこで写真３を見てみましょう。写真１とほぼ同じ構図です。柱の間に見える斜め材は筋交で、明治の修理で挿入された補強材ですから、昭和の大修理前の様子であることは間違いありません。これにも刑部社がありません。写真左奥に営業中のみやげ物屋が写っていますから、修理前の通常公開時の様子が撮影されているとみられます。

つぎの写真４は『國寶姫路城』（姫路市役所、1938）に掲載されている最上階内部の写真です。写真１、３とは構図が異なりますが、これにも刑部社が写っていません。『國寶姫路城』編集が発刊の３年前（昭和10年）から始まっていますので、その段階でも刑部社は無かったとみてよいでしょう。

以上のことから、昭和10～39年には最上階に刑部社は無かった可能性が高いといえます。となると、進駐軍の兵士はいったい何を覗き見していたのでしょうか。また、昭和21年１月、マッカーサーの指令で「**天守閣上層ニ鎮座シ給フ長壁明神ヲ姫路神社内ニ遷座ス**」とされていますが（上田耕三氏調べ）、もともと無かったものを姫路神社に遷座し（本来なら総社に遷座すべきだろうが、空襲で焼失したため不可能だったのかもしれない）、それを昭和40年に再び最上階に戻したというのも奇妙な話です。「**天守閣上層**」とは最上階で間違いないのか、あるいは神棚のようなところにお祀りしていたのだろうか、などと妄想してしまいます。ちなみに、昭和20年７月の空襲で最上階に飛び込んだ不発焼夷弾を処理したという鈴木頼恭氏は、室内には祠など無かったと証言しています。その一方で、戦前から天守には刑部社の祠があったという男性の談話もありますので（埴岡前掲論文の註65）、最上階以外のフロアにあったことも否定はできません。

写真３

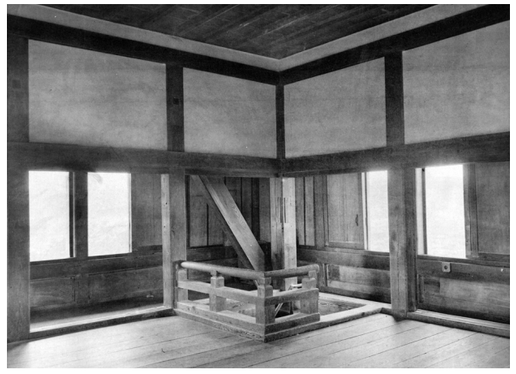
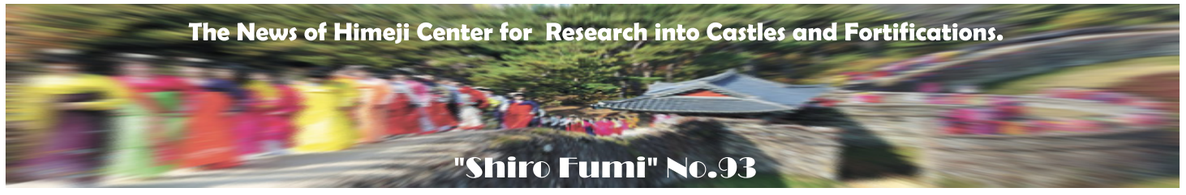


写真４

いずれにしても、最上階にある刑部社は建立されてから50年だということです。大天守の歴史的価値や輝政の病気治癒、八天塔の逸話などを考えると、刑部社が鎮座するのは、姫山の地主神としては鬼門の故地のほうが相応しそうです。そのほうが霊験あらたかだと思いません？